

卿によつても唱へられてゐる。又龜尾記には、藤江村に舞々三太夫といふ者が二戸あると記してゐる。

フチエジロベエ 藤江次郎兵衛 文化中御歩小頭より三十人頭に進み、新知百石を領し、文政四年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

フチエマツサブロウ 藤江松三郎 諱は高虎。本多氏に仕へて足輕に班し、明治元年越後の役に従うて功あり、四年十一月廿四日同志芝木喜内と共に、故主本多政均の仇多賀賢三郎を江州長濱驛に討ち、五年十一月四日自殺を命ぜられた。享年廿八。

フチカケ 藤懸 羽咋郡の舊邑名。承久三年注進の能登岡田數目録に、『藤掛村、四町一段、建保二年立券狀』とあり、天正七年八月廿七日附前田利家の盜賊捕縛を命じた文書の宛所にも、宮木藤かけ村役人となる。藤懸村は後世存せぬが、宮木八幡社傳記に、『藤掛郷内篠波村古號「藤掛」』とあるといふ。

フチカケケンネイ 藤懸玄寧 羽咋郡鹿頭眞宗東派常徳寺十六代の住職で、諱は寧靜、致遠と號し、明治の初年頃寮司に進み、十七年三月十九日歿、阿禪院と稱した。

フチカケゴウ 藤懸郷 羽咋郡に屬し、藩政時代では、深谷・前濱・笹波・鹿頭・小窪・赤崎・千浦・風無・風戸の九ヶ村を含んで居た。

フチカケセンモウ 藤懸千壽 江沼郡山代の人。江沼野夫と稱した。郡内の神社佛閣に掲げた算學の奉額を集録して江沼神壁耳目變紙を著し、男常美をして校訂を加へしめた。弘化二年五十嵐篤好の序文がある。

フチカケトクジユウ 藤懸得住 羽咋郡鹿頭眞宗東派常徳寺の僧で、獅子窟又は無碍窟

と號し、賢珠院と稱した。宗學を巖壁に學び、天保六年高倉學寮の寮司となり、十三年擬講に、安政元年嗣講に、文久元年講師に進み、明治七年三月十五日歿、享年八十三。

フチカケノリサタ 藤懸則定 通稱友之助。七郎左衛門・八右衛門。享保十九年養父八郎兵衛の遺知百五十石を襲ぎ、神田御前附御用人より寶曆四年同附物頭を経て、次第に昇進して大組頭に至り、安永三年百五十石を加へ、九年致仕して仁齋と號し、料二十人扶持を受けた。

フチカケアゼン 藤懸豊前 前田利家に仕へて七千石を受け、利長の大聖寺征伐に従ひ、大音厚用に續いて正門外厩屋上に焚香齋開した。後豊前は浪人し、その子七郎左衛門別に利長より新知四百石を受けた。子孫藩に世襲する。

フチカケヨリヨシ 藤懸頼善 通稱友之助。庫太。準人頼之の養子。天保五年遺知五百石を襲ぎ、大小將・表小將等に歴任した。

フチカケ 扶持方 食祿の一種である扶持米を扶持方といふこともあるが、別に江戸・京・大坂などの詰人に與へる出張手當をいふこともある。後者は知行に應じて人馬の數を定め、その數だけの扶持方として一人一日米一升、馬一疋一日大豆三升をその地の代銀に換算して支給した。

フチカタダイク 扶持方大工 御扶持方大工の始は不明であるが、寛永七年田邊治兵衛に一人扶持を賜はつたのが姓名の顯れた始であらう。二十年亦一人扶持を與へられた者數人あり、爾後逆縮した。

フチゲンユウ 淵元融 金澤眞宗東派逆福

寺の僧。初名歌雄。哲僧に學び、明治二十八年十二月二十二日六十九歳を以て歿。法諡圓性院。後大正十三年本山より擬講を贈られた。

フチシマモクテン 藤島默天 金澤眞宗東派圓長寺十四代の住職。父は湛龍。諱は文英。哲僧に學び、寮司に進み、明治十二年九月廿九日歿、享年五十一。法名華藏院。

フチセ 藤瀬 羽咋郡鉦打郷に屬する部落。邑名は藤津比古神社があるから起る。

フチタカツアキラ 藤田克章 通稱玄登左衛門。文政三年醫を以て藩の老臣長大隅守連要に仕へた。克章は所居を蓬生軒といひ、太

甲鈴鹿又は鈴丸と號し、最も狂歌を好み、傍ら俳諧と持明院流の書とに達し、天保六年七十二歳を以て歿。その孫に維正を出した。

フチタキ 藤瀧 能美郡三坂地内にあつて、高さ十米に過ぎぬが、湖壘の大なること、三條の水の下るとによつて名を知られる。

フチタキチザエモン 藤田吉左衛門 初め吉郎兵衛。御歩より同小頭に昇り、新知百石を受け、寛政元年三十人頭となり、二年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

フチタクラノジヨウ 藤田内蔵允 八郎兵衛の子。新知百五十石を領し、元和元年大坂役に出陣し、岡山口で戦死した。子孫はない。

フチタゲントク 藤田玄徳 御醫師として百五十石を領し、元禄二年歿した。子孫道軒・玄倫・道閑・正春・道乙・道仙等相繼ぐ。

フチタコレマサ 藤田維正 通稱誠一郎、後に六左衛門。字は公甫。容齋と號し、別に咲翁・笑翁・龜月窟主人ともいふた。家世々藩の老臣長氏に仕へたが、維正は明治元年七月明倫堂講師御用雇を命ぜられ、十二月助教加人

履に進み、二年三等文學教師となり、十一月權少屬に任じ、漢文教師を勤め、十二月南北兩院塾生教諭主任となり、三年二月司文司詩兼務を命ぜられ、置懸の後、常に中學又は師範學校に教鞭を採り、明治二十五年八月歿した。年六十八。維正二十一歳の時、初めて大坂に遊び、藤澤東暖に學び、傍ら奥野小山等と交り、文章の結構に關しては之を巽遜齋に問うて大に得る所があり、金澤に歸つて松風社を興し、一篇成る毎に金子愷・永山平太等と互に品評を加へた。是を以て宿儒凋落の後

は、維正嶄然として金城文學の柄を握つた。著す所、詔令集・新賞語教・新童子教・三字經約解・近世述略・新世話千字文・書讀類語・用文類例・鳴鳴文抄・詩學入門・金城文抄・脩身指要・文章梯航・容齋文抄・容齋詩抄等がある。

フチタスケヤス 藤田恭安 通稱長十郎・求馬。父は安勝。元禄中前田綱紀に仕へて新知三百石を賜はり、奥小將・大小將頭を経て、享保の初先引頭となり、同七年父退老の後襲祿して二千石を受け、人持組に列し、十五年小松城番となり、翌年公事場奉行に轉じ、延享元年罷め、三年歿した。年六十五。

フチダナ 藤棚 金澤の町名。犀川川上白山社の境内に往時藤棚があつたので、世人此の附近を藤棚と稱したが、明治四年四月戸籍編成の時町名とした。

フチダナシラヤマジンジャ 藤棚白山神社 金澤藤棚邊の産土神で、もと當山派山伏成福寺の世々奉仕する所であつた。此の附近は昔河原であつたのを、享保の頃築出して町名としたものである。明治元年神佛混淆禁止の後別當は復飾して神職となり、十八年四月八日